

近代家文書の編成と階層

—「別家安島^{あじま}家資料」を例に—

村 上 瑞 木

【要 旨】

近現代の個人資料は、個人の社会的役割をもとにした編成が一般的となっている。しかし、この編成手法は社会的キャリアがはっきりし、それに応じた資料が残されている場合にのみ有効といえる。本稿では、個人資料が重層的に蓄積された近現代家資料を対象に、「家」を組織体として捉え、その中に「個人」を紐付ける編成を試みた。対象とする「別家安島家資料」はいわゆる民間所在資料であり、水戸藩家老安島信立三女安島道が始祖となる別家安島家に蓄積された資料群である。道の資料が中心だが、彼女の没後に家督を相続した人物やその家族の資料も混在しているため、近現代家文書としての編成が必要となった。また、当該資料群は一般家庭の非現用文書であり、世代交代や転居など人的変化に伴い資料が加入する可能性もあるため、将来的に可変性のある編成を試みた。第1節では別家資料の出所の一つである水戸藩士安島家（本家）の来歴と文書群の伝来をまとめ、本家文書群が戦災により焼失している可能性に言及した。第2節では別家の来歴と、平成以降に行われた別家資料の学術的な調査・保存・利活用の実態を明らかにした。第3節では編成の詳細について述べた。結論として、本稿で示した「家」組織と「個人」という視点の編成モデルは、いわゆる「移動する文書たち」の編成に有効と考えられた。また民間所在資料の保存・運用に向けた、継続的なアプローチについても付言した。

【目 次】

はじめに

1. 近世安島家文書の成立

- (1) 水戸藩士安島家の歴史
- (2) 水戸藩士安島家の文書

2. 別家分立と資料群

- (1) 別家安島家の分立と資料
- (2) 断絶と再興
- (3) 学術的な調査とその後

3. 記述編成

- (1) サブフォンド1「安島家本家伝来」
- (2) サブフォンド2「別家（～大正12年）」
- (3) サブフォンド3「再興家」

おわりに

はじめに

「個人文書」を対象にしたアーカイブズ学の研究は、編成記述から構造分析に至るまで事例蓄積があまりされていない現状にある。加藤聖文氏はISAD (G) のシリーズ設定にみられる機能を個人の社会的役割に置き換え、文書群の特性を活かした記述編成のモデル化を提唱した¹⁾。具体的には個人の社会的行為や組織内での役職など公的活動に基づくシリーズと、私的な「個人」「家族」のシリーズを設定する手法である。しかし、加藤氏の提唱は「一個人に蓄積された文書群」という前提のモデルであり、組織での経歴を積み重ねた人物で、かつ職務・活動に応じた資料が残存する場合に有効となる²⁾。よって、職務に応じた蓄積が少ない場合や、個人文書が重層的に蓄積された近現代家文書への直接的な応用は難しい。

橋本陽氏は個人文書の編成に関する欧米での議論をまとめ、日本での個人文書の編成への応用による有効性を検証した。欧米では原秩序が崩壊した個人文書の編成が、加藤氏同様に資料群作成者の活動やアイテムの出所により行われたが、平成22年（2010）以降は原秩序をもとに史料群構造を検討する手法が主流だという。ただし橋本氏の分析も、サリドマイド関連資料を中心とした個人文書の編成であり、「家」の中の「個人」という視点では捉えられない³⁾。

「家」の中の「個人」という視点では、丑木幸男氏が「武蔵国大里郡大麻生村古沢家文書」⁴⁾の編成で当主「個人」をシリーズに設定し、履歴書をもとに役職に応じたサブシリーズを設定している。当該文書群は近世～近代の大規模な家文書であり、近代文書は戸長役場文書と「家」文書に大別され、「家」の中に「個人」が編成された。ただし、大正以降の当主はサブシリーズの設定がなく、歴代当主による個人文書の蓄積が編成されていない。

以上から本稿では、「家」を複数ないし単数の人間で構成される組織体と捉え、そこに「家」と「個人」の二つの視点を含めた編成を試みていく。なお、本稿で扱う資料群は民間所在資料であり、「家」組織の非現用文書に該当する。すなわち世代交代や転居を要因に、構成員たる家族により「整理」「片付け」という名の選別が行われ、新たに非現用文書が加わる見込みがある。さらに、これら要因から家組織そのものの変化や、資料の散逸・廃棄の可能性も考える。実際に加藤氏が分析に用いた山崎元幹文書も旧蔵者の生前から散逸がはじまり、現在では5機関に保管され、各機関で独自の目録が作成されているという⁵⁾。同様に、本稿で扱う文書群も、伝来過程の中で資料の加入と散逸・廃棄が繰り返され現在に至る。よって上記の「家」「個人」の視点に加え、「家」（組織体）の変遷、民間での継続的な文書管理を視野に入れた編成の一事例を提起したい。

1) 加藤聖文「近代個人文書の特性と編成記述—可変的なシリーズ設定のあり方—」（国文学研究資料館編『アーカイブズの構造認識と編成記述』、思文閣出版、2014年）。

2) 加藤氏の手法を用いた奥津憲聖「近現代個人文書が有する価値とその編成—都市プランナー・田村明の旧蔵資料を事例に—」（『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』13、2017年）がある。

3) 橋本陽「個人文書の編成—環境アーカイブズ所蔵サリドマイド関連資料の編成事例—」（記録管理学会編刊『レコード・マネジメント』66、2014年）。

4) 丑木幸男「解題」（『史料館所蔵資料目録 第62集 武蔵国大里郡大麻生村古沢家文書目録（その2）』（国文学研究資料館史料館、1996年）。

5) 前掲註1 加藤論文。

1. 近世安島家文書の成立

本稿で扱う「別家安島家資料」は、水戸藩家老安島信立の三女安島道を祖とする安島家（別家）に蓄積された資料群で、複雑な成立過程を経ている。その伝来を考えるうえで、はじめに組織体の前身で資料群の出所の一つである水戸藩士安島家（本家）の概要を明らかにする。

なおフォンド名「別家安島家資料」は、本家文書の存在が過去に確認でき、かつ現在もその散逸資料が確認できるため、本家と別家を区別する必要性による。また一般的な家文書の場合、地名をフォンドに入れるが、別家は幕末期から現代に至るまで転出が多く、特に長く居住した土地も無いため、地名はフォンドに相応しくない。よって、明治36年（1903）1月に作成された安島信一履歴書⁶⁾の安島道統柄「安島帯刀次女別家養母」からフォンド名を設定した。加えて別家には文書類のほかに、机や刀なども蓄積されているため、「文書類」ではなく「資料群」が相応しいと考えた。以下、「別家安島家資料」の出典は「二次調査」（後述）において筆者が付与した番号を用い、別家概要は（表1）（図1）も参照されたい。

（1）水戸藩士安島家の歴史

「安島」という苗字は戦国大名佐竹氏の家臣・陪臣に多く⁷⁾、水戸藩士安島家（本家）⁸⁾も佐竹右京大夫義宣家臣安島丹後信勝を祖とする。佐竹氏の秋田転封により信勝は常陸国に留まり、その子善衛門信重は慶長7年（1602）に常陸松岡へ転封した戸澤右京亮政盛に仕官した。しかし、戸澤氏も元和8年（1622）に出羽新庄へ転封し、信重は常陸国内に留まった。その後、寛文2年（1662）に信重の子治左衛門信次が、姉婿の水戸藩家老川澄勘解由幸隆の推挙により水戸藩に150石で仕官したが、長男甚内の不行届により暇となった。なお、徳川頼房の藩主時代には川澄家家中に「安嶋次郎太夫」がおり⁹⁾、関係は不明だが信重・信次父子も戸澤氏転封後に川澄家に仕官した可能性があるだろう。

信次の子安島七郎衛門信久は旗本川口摂津守宗恒や守山藩主一門松平主膳頼愛に仕え、宝永7年（1710）に水戸藩家老山野邊兵庫義堅正妻利津（徳川頼房7女）の推挙で水戸藩士となった。その後駒込普請奉行となり、正徳4年（1714）に駒込藩邸の長屋で火事を起こして喜連川屋敷などを類焼させ逼塞となったが¹⁰⁾、以降は代々水戸徳川家に歩行士筋の家臣として仕えた。

その後、信久孫七郎左衛門信可が小十人組頭や右筆などを歴任し、徳川宗翰息女で今出川實

6) 別家安島家資料2-8-1-1（安島信一履歴下書）。以下別家資料は「別家—（番号）」と表記する。なお、資料中では「次女」とあり『水府系纂』なども同様だが、これは生まれて間もなく死去した信立次女「阿栗」が数えられていないためであり、実際は三女である。

7) 常陸太田市史編さん委員会『常陸太田市史編さん史料(19)―佐竹家臣系譜―』（常陸太田市、1982年）、「戸沢家中分限帳（二）」（『郷土資料叢書第10輯』新庄図書館、1977年）。

8) 以下特筆しない限り、水戸藩士安島家の来歴は『水府系纂』巻57（徳川ミュージアム所蔵、茨城県立歴史館所蔵写真本を参照）、「七郎左衛門安島君墓」（安島信可墓）墓誌、『水戸藩史料』を参照した。

9) 水戸下市町年寄岩田太左衛門が藩役所に差し出した歴代藩主拝領品の書上「御達ニ付書上候事」（天保4年）では、岩田家先祖が徳川頼房に宗近の太刀を献上した際の取次に「御取扱者河澄勘解由様内安嶋次郎太夫殿」がいる。『茨城大学附属図書館郷土史料双書1-(7) 水戸下市御用留（七）』（1997年、52頁）。

10) 朝日重章「鸚鵡籠中記」巻25下（『名古屋叢書続編 第12巻 鸚鵡籠中記4』名古屋市教育委員会、1969年）正徳4年10月20日条。

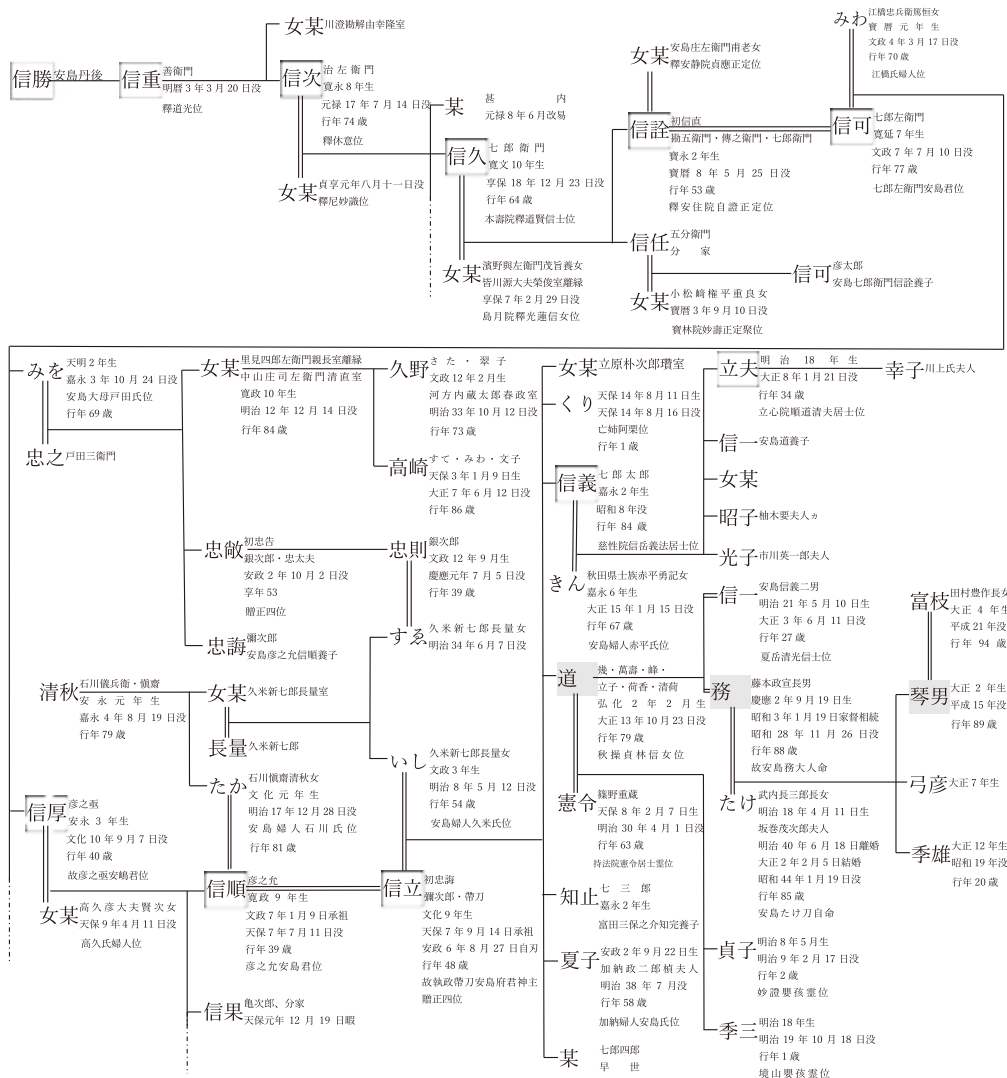


図1 安島家本家・別家系図

□は本家主、[]は本家嫡子、■は別家主、----は系図の省略を示す。主に『水府系纂』巻57（徳川ミュージアム所蔵、茨城県立歴史館所蔵写真本を参照）、『水戸藩史料』、安島家・戸田家墓所、石川愼齋墓誌（いずれも酒門共有墓地在所）、安島家位牌、安島信一履歴書下書（別家2-8-1-1）および港区役所へ請求した戸籍を参照した。

種正妻となった国姫の側用人を勤めた。寛政12年（1800）には京都留守居役となり、家禄も400石に増加し家格が上昇した。信可の嫡系は彦之丞信厚、彦之允信順と続くが信順には子が無く、信可娘「みを」¹¹⁾と戸田三衛門忠之の次男戸田彌次郎忠誨が天保7年（1836）に養子となった。

忠誨は文政12年（1829）の水戸藩主継嗣問題で、従兄安島信順や実兄戸田銀次郎忠敵とともに松平敬三郎紀教（後の齊昭）を擁立した。安島家を相続後に安島彌次郎信立¹²⁾と名を改め、

11) 拙稿 A「史料紹介 安島家文書所収「戸田蓬軒翁五十年祭」関係資料について」（『史学研究集録』47、國學院大學大学院史学専攻大学院会、2023年）。

12) 安島信立の来歴は川瀬教文「水戸藩死事録上編第二」（佐々木克『水戸藩死事録・義烈傳纂稿』同

表1 別家安島家フォンド記述

識別記号	—
資料記号	—
標題	別家安島家文書
年代	1803年～1962年
主年代	江戸後～昭和初
年代注記	享和2-昭和37年、安政期～明治初期・明治30年代・昭和初期が中心
記述レベル	fonds
書架延長／数量	約 4 m + α / 470点
物的状態注記	470点；一部活版・写真・用度品・家具が含まれる。
出所・作成	安島家
履歴	(本稿第1節参照)
(関係地)	<p>【本家】常陸国-江戸本郷水戸藩下屋敷内長屋（1710～1714）-常陸国茨城郡水戸下市蓮池町（～1872）-京都烏丸通下長者町西入北側水戸藩邸（1791～1810）-江戸小石川水戸藩上屋敷（1856～1859）-茨城県東茨城郡石崎村（1883～）-東京府東京市麻布区箆笥町（～1900頃）-（東京府東京市京橋区西紺屋町）（1905頃）-東京府東京市麻布区桜田町（～1938頃）</p> <p>【別家】江戸一橋御殿（～1859）-常陸国茨城郡水戸城二ノ丸御殿（1862頃～1868頃）-常陸国水戸藩水戸上り神崎町借楽園好文亭奥御殿（1869頃～1872）-常陸国茨城郡水戸下市蓮池町（～1875）-神奈川県久良岐郡宮川町（1876～1878）-東京府東京市芝区柴井町（～1896頃）-東京府東京市京橋区西紺屋町（居住1897頃～1914、本籍地～1928）-東京府荏原郡大森町西川端（1914～1923）</p> <p>【再興家】岡山県川上郡宇治村本郷（～1900年頃）-東京府東京市芝区南佐久間町（本籍地1900～1913）・東京府葛飾郡両国（居住～1913）-東京府東京市明舟町（本籍地1913～1928）-東京府荏原郡南品川仙台坂上（居住1913～1914）-東京府東京市麻布区飯倉町（1928～1933）-東京府東京市麻布区森元町（1933～1934）-東京府東京市麻布区狸穴町（居住1934～1945、本籍地1934～1946）-埼玉県浦和市三室町（居住1945）-東京都港区東麻布（狸穴町同所、本籍地1946～現在）-東京都世田谷区池尻町（1947～1953）-宮城県仙台市（1951）-東京都町田市（～2003）-千葉県（1995～現在）</p>
(主題)	水戸藩 一橋徳川家 水戸徳川家 会社役員
(役職等)	水戸藩家老 一橋御殿側女中 水戸藩松御殿中臈 竹隈女学校教員 会社役員
伝来	2003年に安島琴男氏の死去により、氏の長男である現蔵者が現住所へ移管
入手源	出所元に所蔵
範囲と内容	(本稿第3節参照)
評価選別等スケジュール	未定。
追加受入情報	安島家現用資料からの移管可能性あり、未定。
整理方法	—
利用条件	資料群の編成者である村上瑞木が窓口となっております、利用をご希望の方はご相談ください。
使用条件	存命者の個人情報や故人の要配慮情報が含まれるため、一部資料の閲覧に制限をかけております。
使用言語	Japanese, English
物的特徴及び技術要件	虫損、破損、水損あり、未手当状態
検索手段	Excel ファイル
原本の所在	出所元
利用可能な代替方式	出版物において一部代替可能。高須芳次郎編『水戸学大系 水戸名家遺墨集』（水戸学大系刊行会、1942）に一部資料の画像掲載、村上瑞木「史料紹介 安島家文書所収「戸田蓬軒翁五十年祭」関係史料について」（國學院大學大学院史学専攻大学院会編刊『史学研究集録』47、2023）に翻刻文掲載あり。
関連資料	本家旧蔵資料の翻刻として渋沢栄一編『徳川慶喜公伝』5（竜門社、1918）に「安島氏書類」（164～167頁）あり（非現存）。近縁資料群として東京大学文学部所蔵富田文書が存在する。安島信立三男の富田知止が富田三保之介の養子に入り、その際に安島家本家の文書と水戸藩士戸田家の文書が含まれた。近縁資料群の翻刻として戸田保忠『蓬軒遺風』（私家版、1933）がある。
出版物	高須芳次郎編『水戸学大系 水戸名家遺墨集』（水戸学大系刊行会、1942） 戸谷穂高・杉山巖「東京大学文学部所蔵富田文書の紹介」（『東京大学日本史学研究室紀要』15、2011） 村上瑞木「史料紹介 安島家文書所収「戸田蓬軒翁五十年祭」関係史料について」（前掲同）
注記	安島琴男死去後に大部分が廃棄され、当該資料群は廃棄分から安島昌平氏により抜き出された。2012年頃にNPO法人歴史資料継承機構による概要調査が行われ、その後も関係資料が加入した。
収蔵名称	(出所元に所蔵)

齊昭重臣として天保期藩政改革に関与したが、弘化元年（1844）に齊昭が国許永蟄居となった際にその雪冤運動に参加し謹慎となった。嘉永6年（1853）年以降水戸藩士に復帰し、齊昭の海防参与により信立も海防参与秘書掛となり、安政3年（1856）頃には軍艦旭日丸建造御用を勤めるなど、幕府の海防政策に関与した。安政4年には学校奉行として弘道館の運営を担い、安政5年8月に執政（家老）となり、通称を「帶刀」と改め、家禄も800石となった。しかし信立は安政6年8月27日に戊午の密勅への疑義をかけられ切腹となった。その後、文久2年（1862）に罪を赦免され、明治24年（1891）4月に贈正四位となった。

信立の嫡男安島七郎太郎信義は嘉永3年6月に生まれ¹³⁾、万延元年（1860）10月19日に二十人扶持¹⁴⁾、文久2年の信立赦免を機に中之寄合となり300石（信立遺領150石／物成150石）を与えられた。明治2年（1869）に藩の軍制改革で三番衝撃別隊長となり¹⁵⁾、翌年以降は知藩事徳川昭武の東京遊学に随行した¹⁶⁾。その後、明治8年から明治20年まで宮内省主殿寮雑掌¹⁷⁾、明治28年に正八位¹⁸⁾、以降明治32年まで准四等内舍人であった¹⁹⁾。以降の経歴は不明だが、明治41年3月29日には順天堂病院入院中の昭武の見舞に訪れ²⁰⁾、旧主との関係を継続した様子が窺える。信義は昭和8年（1933）頃に84歳で没したとみられる²¹⁾。

信義長男安島立夫は明治18年に生まれ、明治39年に東京高等商業学校予科へ入学²²⁾、明治43年に同校本科を卒業²³⁾、大正5年（1916）頃から東洋汽船会社香港支社会計係となっている²⁴⁾。しかし彼は、大正8年の帰国途上に水難事故で死去し、立夫一女幸子は川上氏に嫁いだため²⁵⁾、本家は断絶したと考えられる。

（2）水戸藩士安島家の文書

続いて安島家の文書の変遷を確認したい（図2）。本家文書の構成に関する情報はほとんど判明せず来歴も不明だが、戸田彌次郎忠誨が安島家の養子となった際に戸田家関係文書の加入が

朋舎、1983年）、流芳會編『勤王實記水戸烈士傳』上編巻2（吉川弘文館、1912年）、田尻佐編『贈位諸賢傳 一』（国友社、1927年）より。

13) 東茨城郡教育会編刊『東茨城郡誌下巻』（1927年）1249頁。

14) 小宮山南梁「南梁年録 四十九」（茨城県立歴史館編『茨城県史料 幕末編Ⅱ』茨城県、1989年）。

15) 水戸市史編さん委員会編『水戸市史 中巻(5)』（水戸市役所、1990年）827頁。

16) 「三年十二月廿二日、徳川昭武水戸藩知事奉職中東京へ遊学」『太政類典 第一編 自慶応三年至明治四年七月 第六十八巻』（国立公文書館所蔵、請求番号：太00068100）、別家1-1-2-6（書状、信義君従四位様学問修行御供方へ御差替えの由）（しう庭→おみちさま、明治5年4月29日）。

17) 『官員鑑』（和泉屋市兵衛他、1875年）。

18) 『官報』3523号（1895年4月1日）。

19) 『職員録』（印刷局、1899年）。

20) 松戸市戸定歴史館所蔵松戸徳川家文書1-1-3-1-21徳川昭武「順天堂入院日誌」（明治41年3月29日条）。なお同日に昭武は手術室などの写真を撮影している。

21) 「安政の大獄の犠牲者、安島帶刀子孫 安島光二氏」（沼崎美三男『茨城人のルーツ』茨城新聞株式会社、1978年）。光二氏の祖父は安島龜松だが、龜松は安政6年（酒門共有墓地墓碑より）に生れており、龜松の父は安島惣之介であるため信立子孫とすると年代が合わない。ほかに同書には安島信義孫の川上幸子氏も証言を残す。

22) 『官報』6916号（1906年7月19日）。

23) 『東京高等商業学校一覧』（東京高等商業学校、1913年）267頁。

24) 『南洋年鑑 第1回』（日南公司南洋調査部、1916年）370頁。

25) 前掲註21「安政の大獄の犠牲者、安島帶刀子孫 安島光二氏」。

近代家文書の編成と階層（村上）

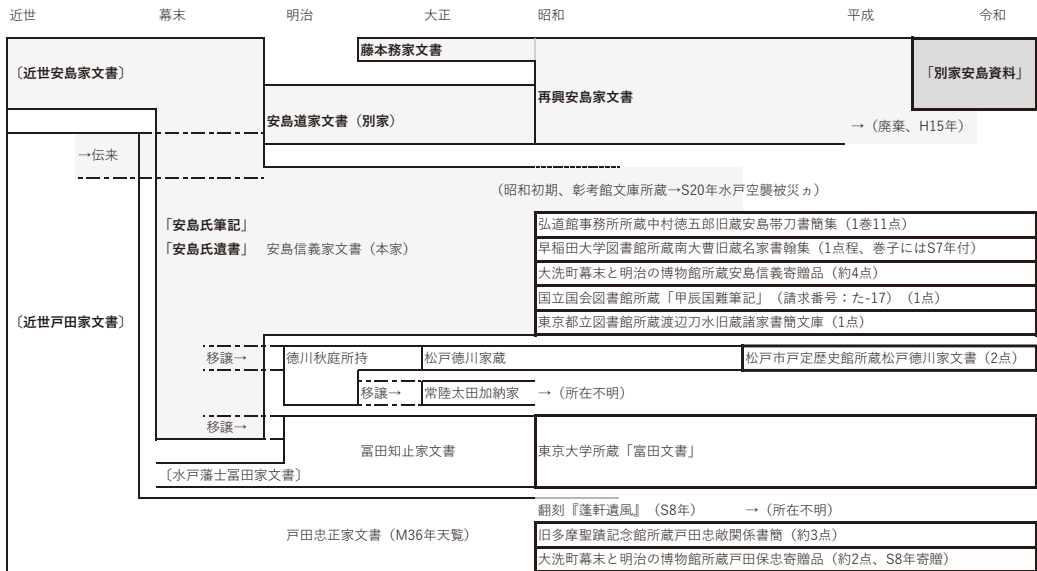


図2 安島家ほか関連文書伝来過程

確認される²⁶⁾。最も古い安島家の文書に関する言及は、「続水戸紀年」での徳川齊昭作詞「鞠歌」の出典「安島氏筆記」である²⁷⁾。次の言及は『水戸烈士傳 勤王実記』（流芳會、1912年）にて安島信立の事績を語る上での出典「安島氏書類」がある。

『徳川慶喜公傳』（1918年）では、第7巻「引用書目」にて「安島氏遺書」が江間政發編「晩香堂雜纂」所収とあり、信立遺品の纂輯物が確認できる²⁸⁾。また、第5巻には「安島氏書類」として「安政四年五月八日文明夫人への呈書」が掲載されるが²⁹⁾、呈書を引用する第1巻には「安島氏遺書」とあるため³⁰⁾、「安島氏書類」と「安島氏遺書」は同一の文書を指すとわかる。

また、前田香徑著作（1940年）³¹⁾では「安島氏遺書」が彰考館文庫所蔵とされ、「雑簡部坤三」などの部立が成立する文書群であった。なお、大正7年（1918）『彰考館図書目録』³²⁾には「安島氏遺書」に当たる項目はみられず、前田香徑の引用は昭和15年（1940）である。安島信義が昭和8年頃に死去した点を鑑みると、「安島氏遺書」は大正7年～昭和8年に彰考館文庫所蔵となった可能性が高い。しかし、彰考館文庫は昭和20年の水戸空襲で罹災し、本家文書も大部分

26) 戸谷穂高・杉山巖「東京大学文学部所蔵富田文書の紹介」（東京大学日本史学研究室『東京大学日本史学研究室紀要』15、2011年）。

27) 石川清秋「続水戸紀年 哀公下」（茨城県史編さん近世史第1部会『茨城県史料 近世政治編I』茨城県、1970年、652頁）。

28) 澁澤榮一編『徳川慶喜公傳』第7巻（竜門社、1918年）479頁。

29) 澁澤榮一編『徳川慶喜公傳』第5巻（竜門社、1918年）164～167頁。

30) 澁澤榮一編『徳川慶喜公傳』第1巻（竜門社、1918年）183・184頁。

31) 前田香徑『烈公の神發仮名と幕末志士の隠し名に就て』（平野書店、1940年）5頁に、「巻頭に掲げたこの二表（筆者註、同書冒頭の「神發仮名」「改正神發仮名」文字一覧）は何処から出て来たかと云へば、福田耕次郎氏の尽力で彰考館本をあさり、漸く『安島氏遺書』雑簡部坤三の中に発見したものである」と語られる。

32) 彰考館文庫編刊『彰考館図書目録』（1918年）。

が焼失したとみられる。

一方で本家から移譲・流出した文書は複数機関に所蔵され、多くは安島信立関係の文書だが、信立没後に娘婿立原朴次郎瓚から安島信立養母・信立夫人に宛てた書簡³³⁾や、明治期の安島信義宛戸田忠正書簡³⁴⁾もあり、明治以降徐々に散逸したとみられる。また、明治天皇から下賜された文鎮を信義が常陽明治記念館（現：大洗町幕末と明治の博物館）に寄贈している³⁵⁾。

安島信立の次男安島七三郎（後の富田知止）³⁶⁾が養子に入った水戸藩士富田家にも安島家本家からの伝来資料が確認できる³⁷⁾。しかし、目録上は「某書状」が多く、安島家由来の文書と、幕末期までに富田家に蓄積された文書が混在した状態となっている。

このほか、信立から齊昭妾仁科氏睦子（徳川秋庭、萬里小路睦子）へ与えられた文書が少なくとも3点が確認でき、うち2点の和歌は松戸徳川家文書に見られる³⁸⁾。ほか1点は信立が描いた絵で、睦子が戸田忠政和歌と一緒に軸装し、大正2年春に元水戸徳川家女中の加納玉子³⁹⁾へ与えており、玉子は安島道にその絵を見せている⁴⁰⁾。以上のように水戸藩士安島家に関する資料は他の資料群に残存している場合もあり、一度安島家から他家に渡った文書が関係者に戻された例もみられた。

2. 別家分立と資料群

以上を踏まえ、次に別家安島家の成立過程と、現在に至る資料群の来歴を扱う。現存資料には享和3年（1803）～昭和37年（1962）の年代幅があり、後述のように安島道関連資料が中核であるため、安政4年（1857）頃～大正12年（1923）頃の史料が大半を占める。なお、詳細な編成については「3. 記述編成」で述べたい。

33) 安島御兩人御隠居宛立原朴次郎瓚書簡（書状、安島帯刀遺書を同家へ届候もの白文也）（茨城県立歴史館所蔵 肥後和男氏関係資料2）。

34) 安島信義宛書簡（東京都中央図書館所蔵 渡5404）。

35) 「明治天皇下賜文鎮一對 御学問所にて安島信義拝領」〔麒麟雲龍文様文鎮〕（幕末と明治の博物館所蔵、番号：皇室74-75）。

36) 「富田知止君」（『御成婚記念復興之魁 一九二四年に於ける大日本人物史』東京朝日通信社、1924年）と之部34・35頁。

37) 前掲註26戸谷・杉山論文。

38) 松戸市戸定歴史館所蔵松戸徳川家文書2-1-4-11安島信立遺墨（2点）。

39) 日立物産会社頭取・茨城県太田町町議会議員を務めた加納甚三郎の弟政二郎と信立四女夏子の娘で、甚三郎養子となり衆議院書記官や住友銀行取締役を務めた加納友之助（立川直行五男）の夫人となる。鈴木桂蔵編刊『常陽立志篇』（1893年）38丁、人事興信所編刊『人事興信録 第8版』（1928年）、別家2-4-1-2「加納婦人安島氏墓」（拓本、1910年）。玉子は、明治23（1890）年3月19日から水戸徳川家松戸戸定邸勤務の女中、翌6月9日から徳川昭武長女昭子附、明治25年2月1日に退職している。松戸市戸定歴史館所蔵『戸定邸日誌』（2-1-2-7、2-1-2-8、2-1-2-9、2-1-2-19）より。徳川家での職歴は同館研究員小寺瑛広氏のご教示による。

40) 別家2-2-1-3『もくつ集 五』大正2年春条「故父^{帯刀}君の梅二鶯の画に御うたよませ給ひて秋庭君へさし上ヶ給ひしを、加納玉子ニ秋庭の君より給はりし物とて自らにミせられければ、いと、昔の忍はれはへりて」。なお、和歌の写しが別家2-2-2安島信一使用『明治四十年懷中日記』（安島道筆記箇所）にみられる。

（1）別家安島家の分立と資料

別家安島家は安島信立の三女で、幕末期に一橋家と水戸藩の奥女中を勤めた安島道（安島氏立子、写真1）を始祖とする。彼女は弘化2年（1845）2月に生まれ⁴¹⁾、幼少期から水戸徳川家奥向に奉仕し「萬壽」と名乗った⁴²⁾。嘉永6年（1853）4月に水戸藩士埴市左衛門に入門し⁴³⁾、その後何者からかは定かではないが有栖川御流を伝授されたとみられる⁴⁴⁾。安政5年（1858）4月25日に一橋家奥女中となり徳川齊昭正妻吉子女王（登美宮、貞芳院宮）から「峰」の名を、同年中に慶喜付側女中となり「道」の名をそれぞれ拝領した⁴⁵⁾。また、この頃から明治6年（1873）頃まで「立子」名義も使用している。その後、安政6年の父信立の切腹により一橋家を辞去となったが⁴⁶⁾、文久2年（1862）の信立赦免による弟信義の水戸藩士復帰と同時期に道も奥女中に復帰したとみられ、松御殿（吉子女王）付中臈となった⁴⁷⁾。元治元年（1864）頃から国学者久米幹文より和歌の教授を受け、朝比奈泰吉編『類題衣手集』に入集するなど、水戸歌壇での活動もみられる⁴⁸⁾。明治2年に『みくつ』⁴⁹⁾を、明治4年に瑞龍山参詣記『あめのなこり』⁵⁰⁾を執筆した。明治5年頃まで吉子女王に仕え、偕楽園好文亭に暮らした⁵¹⁾。奥向辞去後は水戸下市蓮池町の本家屋敷に暮らし、明治6年11月13日に竹隈女学校教員（皇漢学）となった⁵²⁾。以降の職歴は不明だが、道の養子安島信一の履歴書には「維新後無職業」⁵³⁾とある。



写真1 「安島道子 六十五才」

別家2-7-1-5、明治42（1909）年11月30日成瀬紫水撮影、安島昌平氏所蔵。台紙・印画紙の劣化が著しいため、長時間飾られたとみられる。

- 41) 栃木敏男「〈史料紹介〉「蒼龍学校 費中日誌」」（『茨城史林』33、茨城県地方史研究会、2009年）。および位牌の没年・享年より推算。
- 42) 澁澤榮一「故徳川慶喜公の生涯」（竜門社『竜門雑誌』307号、初出1913年、渋沢青淵記念財団竜門社編『渋沢栄一伝記資料』57巻、渋沢栄一伝記資料刊行会、1965年所収）に「慶喜卿が幼少の頃より卿の母堂にて有栖川宮家より御降下相成たる登美宮女王殿下に仕へ給ひ、卿が一橋家の養子となるや、転じて卿の御近侍となれる安島道子刀自」とある。名前は別家1-4-1-1（萬壽事、峰と名を戴候書付）より。
- 43) 前掲註41栃木同書。
- 44) 別家1-3-4-2～12が有栖川御流の書状手習である。筆跡が茨城県立歴史館所蔵江橋さん家文書所収の吉子女王書簡に似ており、道自身が筆写した吉子女王書簡（別家1-1-2-1）も存在するため、吉子女王から発給された書簡を写したと考えられる。
- 45) 別家1-4-1-1（萬壽事、峰と名を戴候書付）。
- 46) 『水戸藩史料 上編』巻26、562頁。
- 47) 徳川ミュージアム所蔵『水府系纂』45巻（茨城県立歴史館所蔵写真版を参照した）。
- 48) 拙稿B「安島家文書に見る久米幹文の国文学教育—奥女中安島氏立子を対象に—」（『茨城県近現代史研究』6、茨城県近現代史研究会、2022年）。
- 49) 別家1-3-2-2（内題『好文亭日記』）。
- 50) 別家1-3-2-4。
- 51) 『熾仁親王日記』巻1（高松宮家、昭和10年）、明治5年9月17日条に「徳川貞芳院登京ニ付、兒梅屋敷江使節男女差出之事」とある。
- 52) 前掲註41栃木同書。竹隈女学校は蒼龍学校の女子部である。
- 53) 別家2-8-1-1（安島信一履歴下書）。ただし、父信義を「維新後無職業」と書くなど事実と異なるた

明治初期以降、茨城県権大属の篠野憲令と婚姻または内縁関係にあり⁵⁴⁾、憲令が工部省鉾山局勤務⁵⁵⁾となった後は横浜宮川町へ転居し、一女貞子（早世）を生む⁵⁶⁾。憲令は備前国盤梨郡田原村の生れで、片桐池田家（周匝領主）医師篠野隆泉一方の養子となった。隆泉は狂歌師としても知られ、長い顎鬚を蓄えたため「腮髭長」と名乗り、一條忠香から髭覆いを賜っている⁵⁷⁾。元治元年に憲令が家督を相続し、明治2年に岡山藩医員差配役支配となった⁵⁸⁾。憲令には弁護士となった一子經と⁵⁹⁾、婿養子で分家となった外務省官僚の乙次郎がいる⁶⁰⁾。このうち安島道は篠野家分家との交際が多くみられ、特に憲令長女で乙次郎妻となった篠野八重子や乙次郎の子秀雄⁶¹⁾、乙次郎実父永原俊章⁶²⁾との交際が窺える。

安島道はその後、明治10年（1877）以降に東京府東京市芝区柴井町へ転居し、明治21年に信義次男信一を養子にした⁶³⁾。明治30年頃から東京市京橋区西紺屋町に暮らし、少なくともこの時期には別家として分立していた⁶⁴⁾。信一没後の大正3年（1914）以降は荏原郡大森町西川端で晩年を過ごし⁶⁵⁾、大正12年10月23日に79歳で死去した⁶⁶⁾。

信一は明治21年5月10日に生まれ、直後に安島道の養子となった⁶⁷⁾。明治27年に泰明小学校入学、明治35年尋常高等卒業⁶⁸⁾、明治42年大倉商業学校を卒業したが⁶⁹⁾、明治45年から脳病を発症し⁷⁰⁾、大正3年6月11日に27歳で死去した⁷¹⁾。信一には子が無く、安島道の死去により別家は断

め正確ではない。

- 54) 岡山県医師会編刊『備作医人誌』（1959年）152～157頁。安島家の位牌に「持法院憲令居士霊位」（俗名篠野憲令、明治30年4月1日没、享年63歳）、「境山嬰孩霊位」（俗名篠野季三、明治19年10月18日没、享年1歳）があり、篠野家と安島道とは大変親しい関係とみられる。一方で道の生みの子であり憲令が父と考えられる貞子の位牌では「俗名安島貞子」と書かれ、法的な夫婦関係にあったか定かではない。道の生前に発刊された人事興信所編刊『人事興信録 第四版』（1915年、さ77頁）の篠野乙次郎の項目でも親族としての記載は見られない。
- 55) 『官員録』明治10年9月（拓隆舎、1878年）。
- 56) 別家2-2-1-1『もくつ集 三』明治8年5月条「おのれ産のいみにひきこもりつる折（後略）」、同書明治9年2月17日条「子二月十七日二オニ卒ス、はしめてもうけつる子の病のことによて、ミまかりつる悲しさに」より。「妙證嬰孩霊位」位牌の没年と照合し、貞子が道の実子と判明する。
- 57) 沼田頼輔『腮髭長』（本郷安次郎、1905年）12～18頁。
- 58) 前掲註54『備作医人誌』157頁。
- 59) 前掲註57 沼田同書131頁。
- 60) 人事興信所編刊『人事興信録 第八版』（1928年）サ131頁。
- 61) 別家2-2-1-3『もくつ集 五』明治44年9月17日条「篠野八重子刀自の伊太利に行給ふに」・同史料明治44年条「篠野秀雄氏へ文の折、両親遠き国に別れ給ひしをおもひやりて」。
- 62) 別家2-1-1-6恭賀新年（年賀状）（永原俊章→安島道・信一、1906年）。
- 63) 別家2-8-1-1（安島信一履歴下書）。
- 64) 同上。
- 65) 別家2-2-1-3『もくつ集 五』大正3年11月19日条「廿年余り住なれし家を、信一身まかりしかハ、立のくとして」、ほか晩年の郵便物より。
- 66) 「秋操貞林信女位」位牌。
- 67) 別家2-8-1-1（安島信一履歴下書）、別家2-2-1-1『もくつ集 三』明治21年5月条「この月の廿日余り二日、をの子信一をかたはらの女のうみたるをわか子としていつくしみたてよとて、うみの子も同じによるひるとなくいたきいつくしみはへるに」。
- 68) 別家2-8-1-1（安島信一履歴下書）。
- 69) 別家2-2-1-3『もくつ集 五』明治42年4月1日条「愛子信一義大倉商業学校を卒業せしことをよろこひはへりて」。
- 70) 同上明治45年7月11日条「四十五年二月頃ハ信一脳病ニカゝり、七月十一日ハ病の床にふし、日増しニあしき方にのみすゝミ、いとなけかわしく心痛のきわみに日を送る折」。
- 71) 「夏岳清光信士位」位牌。

絶した。

（2）断絶と再興

安島道の死から5年後の昭和3年（1928）、「選定家督相続人」として別家を相続したのが縁者藤本務（安島務）である⁷²⁾。選定には存命中の安島信義による関与が考えられ、その理由は不明だが安島家との関係性は次の二つが考えられる。一つ目は、務が岡山県出身のため、同県出身者の篠野憲令と縁故だった可能性だが、決定的な関係は現在のところ見られない。二つ目は務夫人たけの前夫坂巻茂次郎と安島道との交友がみられる点だが⁷³⁾、坂巻家と安島家との具体的接点も定かではない。少なくとも務の実父藤本政宣の喜寿祝や、務の長男琴男の誕生祝に安島道が和歌を贈った例がみられ⁷⁴⁾、安島信義も書簡で「藤本様」に言及しているため⁷⁵⁾、関係者だった点は間違いない。ここでは選定相続前と区別するためサブフォンドを「再興家」とし、以下サブ・サブフォンドとして設定した人物を中心に経歴を述べていく。

藤本務は慶応2年（1866）9月19日に備中国川上郡宇治村神職藤本政宣⁷⁶⁾の長男として生まれる。前半生の経歴は不明だが本籍「芝区南佐久間町103番地」の戸籍では明治31年（1898）5月16日に藤本家廃嫡となり、明治36年1月7日に藤本家分家として届け出ている⁷⁷⁾。このほか、時期は不明だが横浜女学校教諭の経歴もみられる⁷⁸⁾。大正2年（1913）2月5日に武内たけと結婚する⁷⁹⁾。

大正3年9月23日に東洋電気合資会社社員（～大正8年頃）⁸⁰⁾、大正6年12月8日谷村鋳業株式会社取締役を兼務（翌年解散）⁸¹⁾、大正14年7月6日三笠園土地住宅株式会社監査役（～翌年カ）⁸²⁾、昭和2年7月28日に合資会社谷村商会社員⁸³⁾など、新設企業の重役・出資社員を歴任した。このうち谷村鋳業株式会社・三笠園土地住宅株式会社・合資会社谷村商会はすべて谷村清衛という人物が起業・経営したため、彼のビジネスパートナーだったとみられる。昭和3年1月19日に藤本家分家を廃家し、「京橋区西紺屋町六番地安島道」を選定家督相続する⁸⁴⁾。

72) 「戸主安島務戸籍」（東京府東京市麻布区）。

73) 別家2-2-1-3『もくつ集 五』明治39年条「坂巻君の愛子二才、病のことにて御身まからせ給ひしをなけき参らせて」とあり、「戸主坂巻茂次郎戸籍」（千葉県東葛飾郡浦安村）では同年12月26日に次男弘が死去している。また同史料明治40年4月条に「こたひ坂巻君の家刀自の君をむかひ給ひしを祝ひまゐらせて」とある。

74) 別家2-2-1-3『もくつ集 五』大正2年10月15日条「藤本務君のこたひをのこみをもうけ給ひしをよろこひまゐらせて」・同書大正3年8月「藤本政宣君の七十七の賀をことほきまゐらせて」、別家3-1-1-6（書状、立夫結婚につき、琴男へ御菓子差し上げる事）（安島道→藤本務・たけ、大正7年頃）。

75) 別家2-1-2-3（書状、立夫マニラ・香港支社へ勤務に付、神戸より出航日程）（安島信義→安島道、1917年4月25日）に「藤本様へ不悪御伝声之程、偏ニ奉願候」とある。

76) 別家3-1-2-2（安島家住所録）にみられる岡山県川上郡宇治村藤本進彦は同村村社清實八幡神社社掌であるため社家と考えられる。中国民報社編刊『岡山県年鑑 昭和12年』（1936年）492頁。

77) 「戸主藤本務戸籍」（東京府東京市芝区）。

78) 別家3-3-6-3「岡山県人会名簿」（昭和期）。

79) 「戸主藤本務戸籍」（東京府東京市芝区）。

80) 『官報』645号付録（1914年9月23日）。

81) 『官報』1606号本文（1917年12月8日）。

82) 『官報』3869号付録（1925年7月16日）。

83) 『官報』174号付録（1927年7月28日）。設立目的は「鑄物瓦ノ委託販売」である。

84) 「戸主藤本務戸籍」（東京府東京市芝区）。

また、上記経歴の傍ら土木請負業や印刷業も営み⁸⁵⁾、さらに昭和4年10月10日には安島香波というペンネームで『不動貯金銀行は何処まで伸びるか』⁸⁶⁾を著した。地域では麻布区岡山人会相談役をつとめ⁸⁷⁾、戦時中には防火担任者となっている⁸⁸⁾。昭和初期には安島道が拝領した《少女像》（徳川齊昭賛詠草）⁸⁹⁾の利活用を行い、昭和3年に水戸志士遺墨展覧会へ出陳⁹⁰⁾、昭和17年には井田書店『水戸名家遺墨集』に掲載された。いずれも「安島務氏蔵」とあるため、彼の安島家当主としての活動と位置付けられる。昭和28年（1953）11月26日に88歳で死去した⁹¹⁾。

務夫人だけは明治18年4月11日に千葉県東葛飾郡浦安村武内長三郎長女として生まれ⁹²⁾、明治35年4月18日に坂巻茂次郎と結婚し高・弘の2男を生むが明治40年に協議離婚⁹³⁾した。大正2年に藤本務と結婚し、琴男・弓彦・季雄の3男を生み、昭和3年に務とともに安島家に入籍する⁹⁴⁾。昭和44年1月19日に85歳で死去した⁹⁵⁾。

長男琴男は大正2年に生まれる⁹⁶⁾。昭和6年に明治学院中学部を卒業し明治学院商業高等部に進学した後⁹⁷⁾、昭和8年に明治神宮体育大会の競技委員として参加⁹⁸⁾、卒業後に日本タイプライター株式会社に入社し同社仙台支店長となったが⁹⁹⁾、後に退職し東京に暮らす。平成15年（2003）に89歳で死去した¹⁰⁰⁾。次男弓彦は資料が少ないためサブ・サブフォンドを編成しなかった。三男季雄も詳細な経歴が不明だが、大正12年2月14日に生まれ、東京市飯倉尋常小学校を卒業したとみられ¹⁰¹⁾、昭和19年6月8日に麻布区新網町にて20歳で病没している¹⁰²⁾。

（3）学術的な調査とその後

再興家での具体的な文書管理の形跡は確認できないが、麻布区狸穴町の安島邸は昭和20年（1945）4～5月の山の手空襲で全焼しており¹⁰³⁾、安島琴男とその妻子が焼け出されている。この際に別家安島家資料は焼失を免れたため、資料群は疎開されたとみられる。

平成15年（2003）に琴男が死去すると、家の引き払いや遺品整理のなかで別家文書の大部分が廃棄された。その際に一部が筆者の祖父である現当主昌平氏により持ち帰られ、これが現在

85) 帝国興信所編刊『帝国信用録 18版』（1925年）261頁。

86) 銀行図書出版部刊、著者兼発行人安島務、1929年。

87) 別家3-3-6-3「岡山人会名簿」（昭和期）。

88) 別家3-5-2-5-1（写真、安島務・たけ防火担任者襷装着）。

89) 別家1-5-2-1。

90) 「五七 贈正一位徳川齊昭公 色かへぬ」（国民新聞社編刊『水戸流芳遺墨』1928年）。

91) 「戸主安島務戸籍」（東京府東京市麻布区）。

92) 「戸主武内長三郎戸籍」（千葉県東葛飾郡堀江村）。

93) 「戸主坂巻茂次郎戸籍」（千葉県東葛飾郡浦安村）。長男坂巻高は藤本家入籍後も関係が見られる。別家3-1-1-3（葉書、母上の来光を願う旨）（坂巻高→藤本たけ、大正3年11月20日）。

94) 「戸主藤本務戸籍」（東京府東京市芝区）・「戸主安島務戸籍」（東京府東京市麻布区）。

95) 多磨霊園所在安島家墓碑。

96) 「戸主藤本務戸籍」（東京府東京市芝区）。

97) 明治学院同窓会編刊『明治学院同窓会名簿 1962』（1962年）90頁。

98) 明治神宮体育大会編刊『明治神宮体育大会報告書 第7回』（1934年）59頁。

99) ダイヤモンド社編刊『ダイヤモンド会社職員録 全上場会社版 1951年版』（1950年）305頁。

100) 多磨霊園所在安島家墓碑。

101) 別家3-4-3-1第一一五號證明書（東京市飯倉尋常小学校第六学年安島季雄学業成績証明書）（1935年）。

102) 「戸主安島務戸籍」（東京府東京市麻布区）。

103) 安島昌平氏談では、安島邸の玄関・居間・庭に焼夷弾が直撃し焼失したという。

の別家安島家資料に該当する（計470点）。この経緯から、現存資料群は廃棄以前の内的構造を反映した秩序が失われた状態となっている¹⁰⁴⁾。

その後、平成21年頃の松戸市戸定歴史館による概要調査¹⁰⁵⁾と、それを踏まえたNPO法人歴史資料継承機構（じゃんぴん）の現状調査（平成22年～）¹⁰⁶⁾が行われ、当時小中学生であった筆者も調査に参加・見学した。これら調査を本稿では便宜上「一次調査」と呼びたい。まず概要調査をふまえ、早急に保存措置が必要な明治初期写真の保護が行われた。また概要調査時に文書保



参考写真 当主により新たに用意された桐箱と収納状況
2010年2月4日概要画像、小寺瑛広氏より提供。中性紙封筒への封入前の状況だが、この並びが表2の秩序に反映されたかは定かではない。

管の助言受け、当主により桐製の文書箱が用意され（参考写真）、以後はこの箱に全ての文書類が収納されている。続く現状調査では写真を含む文書の棒目録の作成と保存措置が行われ、文書封筒・写真保存器材は同館より提供された。

概要調査後に主に所蔵者側による現状変更があったため、現状調査では文書形態から「1. 文書」、「2. 軸・写真」の区分がつけられ（表2）、以降筆者による整理においてもこの区分を原秩序として用いている。ただし、この際に作成された目録は「文書目録」を基礎台帳として別途「書誌カード」「写真目録」が作成されたが、これらに含まれる情報は「文書目録」に反映されず、目録上での同定ができない状態となっていた。

一次調査の成果として、NPO法人歴史資料継承機構会報『じゃんぴん』での西村慎太郎氏「題名のない一冊—安島家文書の世界—（Season 1～3）」¹⁰⁷⁾・武子裕美氏「我孫子市安島家文書の中の水戸徳川家」¹⁰⁸⁾などがある。その他、同機構・同館主催の報告会「幕末維新の世界へようこそ」（平成24年3月17日、於：松戸市民会館）で西村慎太郎氏報告「1859の残照—安島家文書への世界—」¹⁰⁹⁾が行われたが、最終報告書等は出されていない。

その後、筆者が別家資料を利用して卒業論文¹¹⁰⁾を執筆する際に、新たに分類目録を作成した（図3）。以下、筆者による調査・整理（平成28～令和4年〈2022〉）を「二次調査」と呼びたい。二次調査では上記の目録問題に加え、付番漏れの資料が存在し、一括資料も分割されてい

104) 廃棄以前の状況について当事者である安島昌平氏の談では、安島琴男宅の押入れに複数のビニール大袋に分けて収蔵されていたという。ここでいう内的構造とはこの袋の分割を示す。

105) 松戸市戸定歴史館学芸員齊藤洋一氏（当時）と同館研究員小寺瑛広氏による。

106) 同機構の代表理事西村慎太郎氏（当時国文学研究資料館准教授）・事務局長武子裕美氏（当時学習院大学大学院生）を中心に調査が行われた。NPO法人歴史資料継承機構作成「我孫子市安島昌平家文書調査しおり」（2011～2012年）より。

107) NPO法人歴史資料継承機構 News Letter『じゃんぴん』Vol.9～11（2011～2012年）。

108) NPO法人歴史資料継承機構 News Letter『じゃんぴん』Vol.18（2015年）。

109) 武子裕美「我孫子市安島家文書」（NPO法人歴史資料継承機構 News Letter『じゃんぴん』Vol.12、2012年）。

110) 拙稿「水戸藩奥女中安島家の史料と交際」（2020年度國學院大學提出卒業論文）。

表2 一次調査の番号体系による秩序

原秩序	出所	詳細
0	当主藏品	安島琴男生前の現当主受領分。
1	平成24年調査 状・帳面	廃棄以前の秩序は不明。安島琴男死去後に現当主夫妻が選別。
2	平成24年調査 軸・鋪・その他	廃棄以前の秩序は不明。1に含まれた写真と、安島家玄関脇の衣装ケースに一括された軸類に加え、蔵書を加入。
3	令和2年11月1日加入 仏壇下資料	仏壇は安島琴男死去後に現当主夫妻が引き取る。
4	令和2年11月1日新出 昭和期スナップ写真	伝来は仏壇と同じか。仏壇脇より新出。
5	令和3年4月25日編入 安島富枝氏旧蔵文書	安島家居間の棚より新出。「中鉢屋仙台だがし」紙箱に一括。安島富枝死去後に遺品として持ち帰ったものか。
6	令和3年10月10日編入 安島務氏関係文書	もとは1に含まれたが、調査時に現当主の判断により分割された。史料再発見により編入。
7	令和3年10月10日加入 じゃんぴん未整理分	もとは2に含まれたが、包紙や仮軸など、非文字資料が中心だったため調査対象から除外。現当主による衣装ケースの廃棄により編入。
8	令和3年12月27日加入 じゃんぴん未整理分	もとは1→2に移動した写真の一群に含まれたが、じゃんぴん整理段階で付番されていないと判明したため、新たに原秩序として編成。

なかったため新たに枝番号も付与した。ほかに現状調査時に対象から除外された「0. 当主藏品」もあり、安島家文書を把握・管理する上でも分類目録の作成の必要があった。

二次調査では2-1でみた安島家別家の来歴を踏まえ、大分類に「1. 近世」「2. 近代（明治5年～大正12年）」「3. 近現代（～昭和30年）」を設定し、史料内容による分類を試みた。この分類では「往来」「和歌」「文芸」など、内容での分類を試みたが、保管場所の問題から「書画」（軸）や「書誌」（刊本・写本）、「写真」など、形態や資料種別による項目も残存し、「和歌」など形態分類で細分化した項目もある。よってどの時代に誰が蓄積した資料かが明らかではなく、一項目あたりの資料内容も雑多なため、文書群全体の特徴を踏まえた編成が課題となった。

また、一次調査では「立子」と「道」が別人として認識されたが、立子宛小池道子書簡の封筒「茨城縣蓮池 安島おみち様人々文の返事」¹¹¹⁾から「立子」「お道」二つの名義が同時に使用されたとわかるため、二次調査以降は「立子」＝「安島道」とした。

さらに、二次調査段階で発見された資料が計140点あり、一部は原秩序を有するため、一次調査の区分に追加する形で「3. 仏壇下資料」「4. 昭和期スナップ写真」「5. 安島富枝氏旧蔵文書」「6. 安島務氏関係文書」「7. じゃんぴん未整理分」「8. じゃんぴん未整理分」とした（表2）。二次調査の成果は筆者による論考¹¹²⁾と学会報告¹¹³⁾に限られる。

111) 別家1-1-1-3（書状、有栖川宮女房について）（小池道子→安島道、明治5年10月16日）。

112) 前掲註11 拙稿A・前掲註48 拙稿B・拙稿C「近代移行期の水戸偕楽園における奥向の活動について―奥女中安島氏立子著「好文亭日記」より―」（『国史學』242、2024年）。

113) 拙考報告「水戸偕楽園好文亭における奥向の活動」（国史学会令和4年度大会報告、2022年6月12日、於：zoom）、同報告「瑞龍山参詣記の著述意識にみる幕末期水戸藩奥向の動向」（第61回近世史サマーセミナー報告、2022年9月10日、於：zoom）。

別家 安島家 文書	01. 近世 (～明治6年)	01. 往来	01. 立子 02. お道 03. その他
		02. 和歌	01. 和歌状 02. 和歌清書 03. 和歌集
		03. 文芸	01. 雑帳 02. 随筆 03. 筆写抜粋 04. 手習
		04. 拝領	01. 書簡 02. その他
		05. 書画	01. 墨蹟 02. 絵画
		06. 書誌	01. 文芸 02. 筆・謄 03. その他
		07. その他	01. 調度品 02. その他
	02. 近代以降 安島家別家 (明治7年～ 大正12年)	01. 往来	01. 明治 02. 大正
		02. 日記類	01. もくつ集 02. その他
		03. 和歌	01. 和歌下書 02. 和歌状 03. 短冊
		04. 印刷物	01. 拓本 02. 地図・絵図 03. 雑
		05. 書籍	04. 新聞 01. 茶道 02. 書画芸術 03. 教育 04. その他
		06. 書画	01. 墨蹟 02. 絵画
		07. 写真	01. 鶏卵紙 02. セラチンシルバーほか 03. アンプロタイプ
		08. 家内	00. 非公開 01. 一族 02. 書写抜粋 03. 資料整理 04. 雑
	03. 近現代以降 選定家督相続後 (～昭和30年)	01. 藤本家 時代	01. 米簡 02. 家政・一族 03. 印刷物 04. 写真
		02. 通信類	01. 郵便物 02. 本バナマ 03. 電話料金関係
		03. 家政	01. 租税 02. 不動産 03. 証明書 04. 衛生・健康 05. 金融 06. その他
		04. 学芸	01. 和歌 02. 書籍 03. 教育 04. 墨蹟
		05. 写真	01. 台紙付写真 02. 戦前スナップ写真 03. 戦後スナップ写真
		05. その他	01. 貨幣類 02. 資料整理 03. 印刷物 04. その他

図3 現用の整理分類項目

3. 記述編成

以上のように、別家安島家資料には安島琴男死去以前の原秩序が失われた状態にあり、加藤聖文氏¹¹⁴⁾が述べたような内的構造が存在しない個人文書にあたる。では、当該資料群には具体的にどのような資料が蓄積されたか、冒頭で示した「家」と「個人」に視点を置いた編成を試みたい。以下、編成は（図4）に示した通り、サブフォンド「安島家本家伝来」「別家」「再興家」毎に、サブ・サブフォンド、シリーズの編成を確認していく。サブフォンドでは「別家」が262点と最も多く、次に「再興家」の194点、「安島家本家伝来」が14点と続く。なお、編成は資料群構造の分析を目的に行った点を付言しておく。

(1) サブフォンド1「安島家本家伝来」

本家伝来資料は主に安島信立以前の安島家に蓄積された「安島家関係」、安島信立実家「戸田家伝来」資料、本家から移譲された「安島信立」関係資料に分かれる。ここでは、「安島家」「戸田家」の家関係と、「安島信立」という個人の視点から編成を試みた。「安島家関係」は「伝来品」「書画」のシリーズが編成でき、「伝来品」は写本『桃源遺事』・刊本『掌中和漢年契 全』（浪花堂梓、享和元年〈1801〉）である。『桃源遺事』は幕末期の筆跡とは異なり、光圀関係系図や西山莊平面図が付いているため、近世中期頃の写本と考えられる。年号が判明するなかで最古となる『掌中和漢年契 全』は寛政年間の干支についての貼付と「文化八年」～「慶應四年」の加筆がみられ、貼付の年

代から安島信可用品をその後も使い続けたと推察される。「書画」は文徴明画《青緑山水図》、龜田綾瀬漢詩軸、喜多武清画《桜之圖》などがある。

114) 前掲註1 加藤論文。

「戸田家伝来」も戸田忠敏・藤田東湖の和歌・漢詩を書写した断簡2点のみである。2点とも同一サイズの紙で、うち1点に「藤原忠則」（忠敏の子戸田銀次郎忠則）の捺印があるため戸田家伝来とわかるが、伝来時期は定かではない。

「安島信立」は「旭日丸建造関係」「安島氏遺書」関係「和歌」「刀剣」のシリーズを設定した。「旭日丸建造関係」は信立が建造に携わった幕府軍艦旭日丸に拘わる探索書・指示書であり、唯一彼の経歴をもとに設定した。「安島氏遺書」関係は天保14年（1843）の日光予参への随行時に信立が書写した和歌と、信立が安政6年（1859）4月26日に評定所に出頭した後に作成された和歌草稿で構成される。これらは信立養母たか¹¹⁵⁾・夫人いし¹¹⁶⁾の手許にあった文書と確認でき¹¹⁷⁾、安政6年の和歌草稿は信立切腹後に娘婿立原朴次郎瓚の手を経て安島家に齎されたため¹¹⁸⁾、信立遺品として安島道に移譲された文書といえる。また「刀剣」も安島信立所用と伝わるため¹¹⁹⁾、彼の遺品のひとつと考えられる。このほか筆跡から信立の作と考えられる「和歌」下書が含まれる。

以上、「安島家本家伝来」文書は安島信立関係資料を中核となり、また親類の戸田家や立原家を介し齎された文書も確認でき、伝来過程が様々であった。

（2）サブフォンド2「別家（～大正12年）」

別家資料も家として蓄積された「別家」と、個人蓄積の「安島道」「安島信一」をサブ・サブフォンドに設定した。まず「別家」には「安島家顕彰関係」「明治期写真」「書籍」「書画」「拓本」「図鑑・印刷物」「その他」をシリーズに設定した。「書籍」「書画」「拓本」「図鑑・印刷物」「その他」は蓄積主体や伝来過程が明確ではなく、また別家の家政に拘わる資料も少ない。一方で「安島家顕彰関係」「明治期写真」には安島信立顕彰関係資料や肖像画印刷物、没年月日・享年が書かれた明治期写真（写真2）など、別家における祭祀資料の側面が窺える。

次のサブ・サブフォンド「安島道」では経歴に基づく「幼少期手習」「一橋御殿側女中」「奥向辞去時代」「水戸松御殿中臈」「水戸藩奥向関係」「竹隈女学校教員」「戸田家顕彰事業」「和歌投稿関係」と、「近代私文書」をシリーズとして設定した。「安島道」は223点あり、当該文書群の中核を成す。「幼少期手習」は「女大学」「女教訓之書」などの初等女児教本とその書写物で構成した。「一橋御殿側女中」は安島道が安政5年（1858）4月25日より一橋家奥向に奉公した際の資料で、有栖川御流の「手習状」、慶喜の命で作成した「書写物」、命名書付など「拝領品」

115) 安島彦之允信順夫人。水戸藩士石川慎齋清秋娘。明治17年12月28日に東京で死去。墓所は水戸市酒門町酒門共有墓地の安島家墓域内。

116) 安島信立夫人。水戸藩士久米新七郎長量娘、母は石川清秋娘のため安島たかの姪にあたる。また妹は戸田忠則に嫁ぎ、安島家・戸田家・久米家・石川家での血縁関係がみられる。明治8年5月に死去し、墓所は水戸市酒門町酒門共有墓地の安島家墓域内。「安島婦人久米氏」位牌より。

117) 安島信立が日光予参随行中に安島たかへ送った書簡（弘道館事務所蔵3-21『水藩安島帯刀先生遺墨』卷子）で、齊昭詠草について「御詠等ハ追而写差上可申存まいらせ候」と述べている。

118) 安島信立は切腹前に自身の文書を三田藩士吉田新蔵に渡し、新蔵は縁戚の松平弘之介家臣牧億平に託した。その後、億平から信立娘婿立原朴次郎瓚に文書が渡り、瓚から安島たか・いし兩人に齎された。安島御兩人御隠居宛立原朴次郎瓚書簡（書状、安島帯刀遺書を同家へ届候もの白文也）（茨城県立歴史館所蔵 肥後和男氏関係資料2）。

119) 別家1-7-1-3（脇差 銘「長曾祢興里虎徹入道」）。なお、虎徹作刀とみるには不自然な刀身とされるが、他の水戸藩家老所用刀に似た拵えという。田中伸吾氏のご教示による。

からなる。「奥向辞去時代」は父信立の切腹後に安島道が一橋家奥向を辞去し、文久2年（1862）頃に水戸徳川家へ奉仕するまでが該当し、和歌集を抜粋した「雑帳」や、齊昭六女明子（南部利剛正室、松姫）からの来状を写した「名歌集」がある。

水戸徳川家復帰後から明治5年（1872）頃に辞去するまでは「水戸松御殿中藹」とし、さらにサブシリーズとして「往来」「文芸稽古」「短冊・懐紙」「自作歌集・随筆」「書写物・写本」「箏教本」「用度品」「拝領品」を編成した。「往来」はさらにサブ・サブシリーズとして、受取の名義から「立子名

義宛」「お道名義宛」「その他名義宛」を設定した。「立子名義宛」は主に小池道子・河方翠子など奥女中が発給者である。なお、「立子名義宛」書簡は後述の「文芸稽古」―「久米幹文関係」にも含まれるが、こちらは原秩序をもとに編成した。「お道名義宛」は本家発給書簡、齊昭側妾仁科氏睦子書簡が含まれ、睦子書簡は明治4～5年頃が多いため、一時的な傾向とみられる。「その他名義宛」は安島信義から送られた「好文亭 尊姉机下」宛書簡である。

次のサブシリーズ「文芸稽古」でも「久米幹文関係」「和歌状」の二つのサブ・サブシリーズを設定した。久米幹文は安島道に和歌を教授した国学者で、詳細は拙稿¹²⁰⁾に譲るが和歌教授に関する書簡と帳面が含まれる。彼の発給書簡は立子名義宛に発給され、教授に関わらない書簡のみ「おみち」名義がみられる。なお、お道名義宛「久米」発給書簡封筒一括と、包紙「久米幹文先生の御書」一括があるため、これら原秩序をもとに編成した。この文芸稽古の中で作成・添削された和歌草稿を「和歌状」とした。ほとんど久米の添削とみられるが、久米以外に国学者朝比奈泰吉からも教授を受けた例¹²¹⁾があるため、文芸稽古による蓄積資料として位置付けた。

続くサブシリーズの「短冊・懐紙」は奥向で作成された和歌懐紙と、安島道が参加した歌壇で扱われたとみられる短冊から構成される。サブシリーズ「自筆歌集・著作物」は奉献和歌集と、安島道が著した『みくつ』（明治2年）・『あめのなこり』（明治4年）で構成される。著作物は主に奥向の活動の中で作成された。この二つのサブシリーズは先の文芸稽古による成果として挙げられるだろう。

サブシリーズ「箏謡本」は「撫箏雅譜集」「琴曲鈔」などの写本であり、水戸藩奥向では雅楽合奏が行われたため、これら行事にかかる資料と見受けられる。続く「用度品」は安島道が奥



写真2 「安島信一 二十四才」

別家2-7-1-6、明治44年（1911）大正写真所（水戸下町中野写真館）撮影、安島昌平氏所蔵。撮影日のほかに没年月日・享年が見返しに書かれている。表紙は酸化が進んでおり、印画紙も劣化しているため、長時間日光にあたる状態で置かれていたとわかる。よって、信一没後に彼の祭祀を目的に飾られたと考えられる。

120) 前掲註48 拙稿B。

121) 同上。久米が体調不良の場合、朝比奈泰吉が兼題送付と添削を行った。

フ	ン	ド	サブフ	ン	ド	シ	リ	ズ	サブシ	リ	ズ	サブ・サブシ	リ	ズ																	
別家安島家資料	470	安島家本家伝来	14	安島家関係	6	伝来品	2		アンプロタイプ	2	鶏卵紙写真	4	POP	3																	
						書画	4																								
						戸田家伝来	2																								
						安島信立	6	旭日丸建造関係							2																
								「安島氏遺書」関係							2																
								和歌							1																
								刀剣							1																
						別家 (～大正12年)	262	別家文書							35	安島家顕彰関係	3														
																明治期写真	9														
																書籍	5														
																書画	4														
																拓本	7														
																図譜・印刷物	6														
																その他	4														
																安島道	223	幼少期手習	6												
																		一橋御殿側女中	14	手習状	11										
																				書写物	1										
						拝領品	2																								
						「雑帳」類	3																								
						書写物	2																								
						往来	18	立子名義宛							4																
								お道名義宛							12																
								その他名義宛							2																
						文芸稽古	26	久米幹文関係							10																
						短冊・懐紙	14	和歌状							16																
						自筆歌集・随筆	7																								
						筆写物・写本	13																								
						筆教本	4																								
						用度品	4																								
						拝領品	13	有栖川宮関係							6																
								水戸徳川家関係							7																
						水戸藩奥向関係	6																								
						竹隈女学校教員	4																								
						戸田家顕彰事業	7																								
						和歌投稿関係	10																								
						近代私文書	72	私信・郵便物							10																
								和歌類							18	『もくつ集』	6														
																和歌下書	11														
																短冊	1														
																茶道	11														
																水戸徳川家関係	8														
																拓本・書画	6														
																新聞類	15														
																書写抜書	4														
								安島信一							4																
						再興家 (～昭和30年代)	194	藤本家関係							7	家政関係	2														
																写真	5														
																近代安島家関係	122	家政	15	貯蓄・金融	3										
																		租税・電話料金	8												
																		貨幣類	4												
																		衛生	10												
																租税	2														
																写真	11														
																祭祀関係	14														
																印刷物	9	チケット類	3												
																		新聞付録	4												
																		その他	2												
																書画類	8	寺田梧鳳	3												
																		一族	3												
																		その他	2												
																蔵書	2														
																用度品	4														
																資料整理	9														
																写真	38	台紙付写真	4												
																		スナップ写真	34												
																安島務	32	勤務	9												
																		麻布区岡山県人会相談役	1												
																		水戸志士遺墨関係	2												
																		投資	13												
																		来簡	4												
																		和歌	2												
																		写真	1												
																		安島たけ	2												
																		安島琴男	10	教育	1										
																				来簡	4										
																和歌	5														
																安島季雄	5	教育	2												
																		写真	3												
																安島昌平	16	教育	1												
																		写真	15												

図4 別家安島家資料編成案

女中時代に所用したと伝わる鉄鏡や短刀である。短刀は仁科氏睦子所用刀が水戸藩刀匠直江助俊作として知られるが¹²²⁾、安島道所用刀も同じ「助俊作」である。

最後のサブシリーズ「拝領品」は「有栖川宮関係」「水戸徳川家関係」に分かれる。「有栖川宮関係」は4点が齊昭正妻吉子女王宛折紙で、差出人は知恩院門跡尊超入道親王・徳川家慶正妻喬子女王・有栖川宮熾仁親王ら有栖川宮家出身者である。折紙全てに安島道の貼付紙があり、「貞芳院宮様江徳川十二代將軍ノ御台所、有栖川宮様々御入興たか子宮様々御文 御親筆」「是も同したか子宮様御親筆 貞芳院宮様の御姉姫宮様也」など、貼付紙同士の文面の繋がりが見られるため、同じ纏まりとして認識されたとわかる。これらの拝領時期は不明だが、將軍御台所や將軍に授戒した入道親王が含まれるため、吉子女王を介して有栖川宮家・徳川將軍家との所縁を示す目的が考えられる。他に有栖川御流で書かれた詠者不明の和歌懷紙があり、その包紙に「宮様方御筆 大切物」とあるが、懷紙以外の同封物は安島道が近代に詠んだ和歌など「宮様方」に該当しないため、「一次調査」以前に内容物の混乱が起こっていたようである。恐らく「宮様方御筆」は先の折紙を指すとみられ、包紙は折紙を包んでいた可能性があるだろう。以上から、これらは次の「水戸徳川家関係」同様、吉子女王から下賜された水戸徳川家由来品だが、貼付紙での認識と包紙の可能性を踏まえ、サブ・サブシリーズとして独立させた。

「水戸徳川家関係」は上記以外の拝領品で構成される。このうち、《少女像》¹²³⁾には齊昭の賛が書かれ、題箋に道の幼名「幾子」が書かれているため、一橋家奥向奉仕以前の拝領品の可能性がある。また、吉子女王が還暦記念に描いた《大黒天図》（元治元年）と、〔竹・梅・鶯押絵 道具差〕がみられ、これらは奥女中奉仕のなかでの拝領品である。このほか、拝領時期不明だが齊昭16男松平忠和の墨蹟もみられる。

以上がシリーズ「水戸松御殿中臈」の内訳だが、ほかに授受作成に安島道が関与しない奥向関係資料をシリーズ「水戸藩奥向関係」に設定した。吉子女王から「坂上」に宛てられた書簡や、道の従姉にあたる奥女中河方氏翠子（御殿名久野）作成の和歌添削帳がみられる。

次のシリーズは、奥向辞去後に安島道が「竹隈女学校教員」として蓄積した資料である。「女児小學校則教則」「小學女生徒大試験課目表」など教務関係や、吉子女王から贈られたと考えられる書籍目録の写しからなる。

続く「戸田家顕彰事業」は戸田忠敏五十年祭に関する資料を編成した。この詳細も拙稿¹²⁴⁾に譲るが、戸田忠敏の孫忠正が開催した五十年祭での和歌の募集に安島道が応じており、ここでは彼女が携わった活動と位置付けた。これに関連するシリーズ「和歌投稿関係」は、道が和歌を新聞¹²⁵⁾や雑誌¹²⁶⁾に投稿しており、それに伴い収集した新聞切抜が当てはまる。

122) 短刀 銘「常州水戸住直江助俊謹造／安政丁巳 応萬里小路氏睦子君之命」・黒蠟色染合口拵（茨城県立歴史館編刊『特別展 鋼と色金 茨城の刀剣と刀装』図録、2021年、38頁）。

123) 別家1-5-2-1。「此書は齊昭公酔後の席上、立原杏所を召して、特にこの図を画かしめ自ら之に賛せられたるものなり」（『水戸名家遺墨集』1942年、井田書店）とある。しかし、題箋に「烈公御筆 安島道子 幼名幾子」とあり、衣服は「ア」で縞模様（＝「安島」）が描かれるため、絵のモデルは安島道と考えられる。立原杏所は安島道生誕以前に死去したため、彼の作とは言い難い。

124) 前掲註11 拙稿 A。

125) 別家2-2-1-1『もくつ集 三』明治33年9月22日条に「秋水、萬朝報へ出ス、五十面」とあり、和歌に「。当」の記号が書かれる。同年9月27日条にも「山家虫、朝報、五十一」とあり、「。当」の記号がある。

126) 『弘道』374号・376号（日本弘道会、1923年）。

最後のシリーズ「近代私文書」は「私信・郵便物」「和歌類」「茶道」「水戸徳川家関係」「新聞類」「書画」「書写拔書」のサブシリーズで構成される。「私信・郵便物」は年賀状や安島信義・信義娘光子に親族の書簡で構成され、明治30年代が中心である。安島道が京橋区西紺屋町在住時に和歌で交流した書肆有隣堂四世穴山篤太郎¹²⁷⁾・銅石版画家中村月嶺¹²⁸⁾らの資料も含まれる。なお中村月嶺は有隣堂（穴山）の広告も手掛けており¹²⁹⁾、京橋区内でのコミュニティの存在が窺える。

次の「和歌類」は『『もくつ集』』『和歌下書』『短冊』のサブ・サブシリーズに分かれる。『『もくつ集』』は安島道の明治7～大正5年頃の和歌日記『もくつ集』とその稿本で、巻三・巻四前半稿本・巻五・巻五後半稿本と和歌書付を含む。書付は巻五後半稿本の袋綴部分に挟み込まれていたもので、「和歌下書」の多くも『もくつ集』に所収されるため、これら下書「もくつ」（藻屑）を集めた和歌集を『もくつ集』と呼んだとわかる。このほか「短冊」は晩年の和歌だが、『もくつ集』には入集していない。

続く「茶道」は茶道師匠松雨庵清喜から「安島清荷」名義で安島道が受け取った表千家流茶道書が中心となる。松雨庵から「茶通箱」「唐物点」「台天目」が送られ、同じ様式の写本に「茶式花月集 下」があり、刊本『茶式花月集 後編』（天保11年〈1839〉刊）もみられる。

「水戸徳川家関係」は最も多いのが幕末～大正の水戸徳川家老女中山高崎に関する品で、昭武撮影の高崎写真と高崎発給書簡である。このほか江崎禮二撮影の吉子女王・徳川昭武・昭武娘昭子写真、吉子女王の扇面詠草複製（傘寿記念カ）がある。また、水戸徳川家小梅邸付近に居住した関口眞也画の川蟬図もみられ¹³⁰⁾、同人画が水戸徳川家分家松戸徳川家資料にも含まれるため¹³¹⁾、水戸徳川家関係と位置付けられる。中山高崎は先述した河方氏翠子の妹であり、道の従姉にあたる。高崎を介して水戸徳川家との交際が行われたため¹³²⁾、以上の品々は両者間で贈答されたと考えられる。

「新聞類」は明治38～39年の日露戦争関連の新聞や切抜きなど15点で、時事ニュースが多い。特に『もくつ集』に言及される日露戦争関連記事¹³³⁾が見られ、徳川慶喜の記事もあるため、蓄積主体が道とわかる。このほか明治25年頃の新聞を抜書した冊子もみられ、水戸藩関連の記事

127) 古林亀治郎編『現代人名辞典 第三版』（中央通信社、1912年）ア30頁。谷中霊園甲9号16側に初世～四世の穴山篤太郎墓があり、没年から安島道と交際したのは四世と推定した。なお、横浜伊勢佐木町で松信大助が創業した後の株式会社有隣堂とは異なる。

128) 中村月嶺は唐木細工職人中村斧丸長男として江戸中橋に生まれ、樋口探月斎に狩野派画法を、元薩摩藩御用絵師柳田龍雪に銅版画技法を学ぶ。紙幣寮に入った後、京橋区中橋広小路に銅石版画印刷所晴雲堂を開く。成瀬麟・土屋周太郎編『大日本人物誌』（八紘社、1913年）な之部81・82頁。

129) 森登「銅石版画万華鏡331 中村月嶺」（日本古書通信社編刊『日本古書通信』75-5、2010年）。

130) 関口眞也は彫金家関口一也の子で、橋本雅邦より狩野派を、村瀬玉田に四条派を、野村文舉に花鳥山水を学んだ。前掲125) 成瀬麟・土屋周太郎同書せ之部3頁。なお、一ノ瀬浄芳が鍍金し、関口一也・眞也父子が彫金した寸筒《竹の一節》（1916年）の作例があり、眞也は絵画だけでなく彫金もしていたと判る。公益財団法人泉屋博古館編刊『花を彩るうつわ—大郷理明コレクション—』（2025年）12・95頁。

131) 松戸市戸定歴史館編刊『プリンス・トクガワ 改訂版』（2021年）70頁。

132) 『徳川秋庭日記』明治43年11月6日条に「安島道子さまおせんじ茶葉、高崎さま御伝へ二而送り被下」とある（松戸市戸定歴史館所蔵松戸徳川家文書1-1-3-2-1『熱海滞在中おほえ 明治四十三年九月五日の覚 明治四十四年一月の』）。

133) 別家2-2-1-3『もくつ集 五』では「大山元帥初メ諸将校の凱旋を」や「東郷大將始メ諸将校を東京市の歓迎し給ふを」など、日露戦争への注目が大きい。

が日立つ。「拓本・書画」では安島道の手許に蓄積された拓本類と、彼女が「安島荷香」名義で描いた水墨画で編成した。拓本は道の妹加納夏子（信立四女）の墓誌がみられ、夏子の息子直彦から道に贈られた記録が『もくつ集 五』で確認できる¹³⁴⁾。「書写抜書」は戊辰北越戦争記の写しなどである。

なお、編成には反映しなかったが、養子安島信一関係資料の転用もみられる。ひとつは「S. Ajima」の署名がみられる手帳であり、記載内容は安島道による和歌の筆写が殆どである¹³⁵⁾。同様に先述した『もくつ集』巻五後半稿本にも「小生脳病の為困却罷在候…」と記された反故紙を使用しており¹³⁶⁾、信一の発病後に彼の蓄積資料が養母安島道に引き継がれたと判る。

最後のサブ・サブフォンド「安島信一」は水墨画《葱図》・履歴書下書・メモ帳からなる。《葱図》は赤ペンで「10」と点数が書かれており、履歴書も信一の学歴が書かれているため、教育関連の資料が中心といえる。

以上のように、サブ・サブフォンド「安島道」が文書群の中核を成し、彼女の経歴をもとに幕末期から大正期までの資料が蓄積されていた。「有栖川宮家関係」のように「大切に物」として安島道により整理された資料がある一方、サブ・サブシリーズ「和歌状」に含まれる近世に作成された和歌状の一部に近代以降に反故紙として使用された形跡がみられ¹³⁷⁾、明治期以降の安島道自身による現用・非現用・廃棄の認識が窺える。

(3) サブフォンド3 「再興家」

「再興家」は194点あり、「家」としての「藤本家関係」「近代安島家関係」と、「個人」としての「安島務」「安島たけ」「安島琴男」「安島季雄」「安島昌平」で編成した。はじめに安島家再興以前の「藤本家関係」の資料を確認する。「藤本家関係」は「家政関係」「写真」の2シリーズに分かれる。「家政関係」は藤本琴男名義の郵便貯金通帳や、住所録がみられ、「写真」は務・たけ夫妻の結婚写真をはじめ、藤本家の家族写真で構成される。

安島家再興後の「近代安島家関係」はシリーズ「家政」「安島富枝旧蔵家政資料」「祭祀関係」「印刷物」「書画類」「蔵書」「用度品」「資料整理」「写真」に分かれる。「家政」はさらに「貯蓄・貯金」「租税・電話料金」「貨幣類」に分かれ、戦前の租税関係資料、終戦直後の「個人融通通帳」「家庭用品購入通帳」などが中心である。

次の「安島富枝旧蔵家政資料」は平成23年（2011）に死去した琴男妻安島富枝の旧蔵資料で、原秩序をもとに「衛生」「租税」「写真」のサブシリーズを編成した。区民税徴収税額通知書や種痘証明書、妊娠婦手帳、狂犬病予防接種証明など、終戦直後の家族の健康に関する資料が含まれ、まさに富枝が「母」「妻」として蓄積した資料である。

134) 別家2-2-1-3『もくつ集 五』明治43年5月条「亡妹加納夏子主の墓碑を建しとて直彦主の石すりおこせたるに」。

135) 別家2-2-2安島信一使用『明治四十年懷中日記』。

136) 別家2-2-1-4「詠草心おほえ」（1912～1916年）。上記のほか「役員及職工融通規定」の複写物もみられる。

137) 別家1-2-1-11【表】（詠草、「河五月雨」二首、「山五月雨」二首、「雨後夏月」二首、「深夜水鶏」二首、「難忘恋」二首、「被忘恋」二首、「通書恋」二首、「述懐」二首）・【裏】（書状下書、詠草「城南貴社の二周年を祝ひまゐらせて」七首）。表面は近世に作成されたが、裏面は近代の記述である。別家2-2-1-3『もくつ集 五』の明治38年9月25日条に「城南の社の一周年を寿まゐらせて」がみられる。

シリーズ「祭祀関係」は近代以降に作成された資料が多く、経典や紙位牌に加え、霊園使用許可証など墓地関係資料が含まれる。「印刷物」はさらに「チケット類」「新聞付録」「その他」に分かれ、天皇肖像写真や「復興局公認東京及横浜復興地図」などの「新聞付録」や、使用済記念乗車券など、戦前の資料が多い。

「書画類」は作者ごとにサブシリーズを設定した。「寺田梧鳳」画は3点確認でき、梧鳳は右田年英・望月金鳳の門下で荏原郡品川町北品川に暮らしたため¹³⁸⁾、同町南品川に暮らした藤本務との地縁で蓄積された可能性がある。加えて、「その他」は中村左洲¹³⁹⁾画・橋本菱華¹⁴⁰⁾画・中村玲章¹⁴¹⁾画で構成され、いずれの画家も安島家との関係は不明だが、先に登場した関口眞也・寺田梧鳳と同様、京都画壇由来の画家である。

このほか、シリーズ「蔵書」は書道関連書籍、「用度品」は安島家で用いられた煙草盆と文机で構成される。「資料整理」はまくりを巻いた木軸や、中身不明の軸箱¹⁴²⁾、包み紙など、安島家で使用された保存器材である。「写真」は写真形態から「台紙付写真」「スナップ写真」のサブシリーズを編成した。

続いてサブ・サブフォンド「安島務」では、経歴や活動に基づくシリーズ「勤務」「麻布区岡山県人会相談役」「水戸志士遺墨関係」「投資」と、「来簡」「和歌」「写真」で編成した。まず「勤務」はパナマ帽の原料トキヤ草の葉を裂いた本パナマ材と、「登録商標 東洋パナマ」の販売を行った谷村商会関連資料で構成され、同社社員としての蓄積資料である。このほか務が神戸保町で経営した鉄鋼工場の証明書もある。

次のシリーズ「麻布区岡山県人会相談役」は昭和15年（1940）に創立された麻布区岡山県人会名簿である。「水戸志士遺墨関係」は務が《少女像》を水戸志士遺墨展覧会（昭和3年）に出陳した際の印記と、同資料を掲載した『水戸名家遺墨集』（昭和17年、井田書店）からなる。「投資」は務の著作『不動貯金銀行は何処まで伸びるか』（昭和4年）に関連する金融資料として、務が保有した株券や米価推移表、居宅以外の土地に関する地上権設定契約書などから編成した。

続く「来簡」は安島道の来状のほか、終戦直後の藤本家一族の近況を伝える葉書もみられる。「和歌」は務の和歌稽古帳で、勅題「社頭松」から明治41年（1908）頃と考えられる。「写真」は昭和5年10月付けの務写真で、裏面の「香波志人」から務の所有物と推定される。

以下それぞれ点数が少ないが、サブ・サブフォンド「安島たけ」「安島琴男」には安島道書簡がみられ、再興以前の安島家縁者としての資料が多い。また「安島季雄」「安島昌平」は教育関連資料が多く、また季雄と昌平氏がともに写っているスナップ写真もみられた。

以上、サブフォンド「再興家」でも「家」と「個人」の視点から編成を行い、「家」文書では昭和10～20年代の家政文書が122点みられ、選定家督相続以前の藤本家時代の資料もみられた。「個人」では安島務の文書が32点と最も多く、「再興家」で唯一経歴をもとに編成可能であった。

138) 尾崎晩雪著『古今絵画名家録』（洛陽美術社、1919年）129頁。

139) 中野雅宗編『日本書画鑑定大事典』第3巻（国書刊行会、2007年）3頁。伊勢の画人で、磯部百麟に四条派を学ぶ。

140) 荒木矩編『大日本書画名家大観 伝記 下編』（大日本書画名家大鑑刊行会、1934年）2137頁。竹内栖鳳門下で、木島櫻谷と双壁をなした。

141) 中野雅宗編『日本書画鑑定大事典』第9巻（国書刊行会、2012年）570頁。徳島の画人で、はじめ徳島の團藍舟に、後に福井江亭に画を学ぶ。

142) 現存の軸とはサイズが合わず、すでに廃棄された軸の箱と想定される。

おわりに

以上のように、「別家安島家資料」では「家」と「個人」の二つの視点から編成をおこなった。先行研究では個人文書が内的構造を反映した原秩序を失った状態にあると指摘されたが、加えて本稿では家の変遷と重層的な人的変化の把握が資料群の編成を考えるうえで必要な要素となった。結果、当該資料群には有栖川宮関連の書簡から本パナマ材まで資料の内容や形態が多岐にわたる特徴があり、一部原秩序の復元もでき、編成の細分化が顕著となった。また、安島道により幕末に作成された資料が明治期には反故紙として使用されるなど、資料作成者による「現用→非現用」の過程も窺えた。

安島家本家は元来水戸藩に仕えた家であり江戸・水戸が主たる活動領域であったが、別家安島家は明治以降転居を繰り返し、さらに岡山県出身者が家督を相続したため、頻繁な家内状況の変容による資料群の移動・散逸や、生活変化が編成細分化の要因として挙げられる。このような所謂「移動する文書たち」は西村慎太郎氏によれば近代以降の没落や災害・戦争などによる移動により生じたとされ¹⁴³⁾、近現代「家」組織文書の一特徴として捉えられる。特に「別家安島家資料」は前組織である本家の文書が一部加わりつつも、ほとんどは幕末期以降に蓄積された資料であり、まさに近現代を通して成立・蓄積した資料群といえる。今回示した「家」組織と「個人」という視点の編成モデルは、近現代以降の「移動する文書たち」の編成を行ううえで有効と考えられる。本稿では新家創出・選定家督相続という大きな改変を起点にサブフォンドを設定したが、大正期から核家族世帯の増加が指摘されているため¹⁴⁴⁾、旧来の家組織から分離された夫婦単位による家組織の蓄積も編成として可能であろう。

ただし、「移動する文書たち」は自治体を超えて移動したために、「地域に根ざさない資料」として元の地域はもとより現在の地域でも文化財として把握されず、廃棄・散逸・分散する傾向にある¹⁴⁵⁾。安島家も本家文書は焼失した可能性が高く、別家も幕末期の争乱・関東大震災・東京大空襲をくぐり抜けたが世代交代による廃棄が行われ、長らく文化財として捕捉されず不安定な状態にあった。これらを踏まえると、民間アーカイブズを如何に保全・運用するかが問題として浮上する。

「別家安島家資料」は所蔵者側から近隣の松戸市戸定歴史館への情報提供により、NPO 法人歴史資料継承機構を中心に専門家の連携による保存措置が行われ、これらが所蔵者の意識を変え現地保存の契機となった。一方で当該文書群は一次調査後に長期間利活用されず、詳細な調査報告も出なかった¹⁴⁶⁾。この曖昧な調査状況に加え、目に見える成果が少ない状態は所蔵者の関心を薄め、再び利活用が難しい状況となってしまうだろう。幸い、当該資料群は所蔵者の孫

143) 西村慎太郎「地域歴史資料と『移動する文書たち』の問題を考える」(人間文化研究機構編刊『人間文化研究情報資源共有化研究会報告集』4、2013年)。

144) 森岡清美・望月嵩『新しい家族社会学』(培風社、1983年)、国立社会保障・人口問題研究所編『人口統計資料集 2017年改訂版』表7-1「総世帯および世帯の種類別世帯数 1920～2015年」。

145) 工藤航平「北海道所在の民間アーカイブズの特質—分割管理された「移住持込文書」の伝来と意義—」(国文学研究資料館編『社会変容と民間アーカイブズ—地域の持続へ向けて』勉誠出版、2017年)。

146) NPO 法人歴史資料継承機構 HP に各プロジェクトの進捗状況が書かれたが、当該文書群は「調査継続中」であった。現在は HP (<http://rekishishiryo.com/>) が閉鎖され、参照不可能である。

である筆者が整理を行い、研究対象として利活用したため、文書群の維持管理がされたと自負している。民間所在資料の利活用には、如何に専門家と連携して利活用を促進するかが課題であり、調査状況の報告や所蔵者と専門家との継続的な関係維持など、長期的なアクションが求められるだろう。

現状では筆者による研究活用が行われているが、今後は他の研究者・研究課題への提供や、そのためのデータベース作成、情報共有、目録公開、展示など、利活用の課題が多く残される。これらは筆者の力量に拘わるところであり、あらゆる分野の研究者や諸機関との連携を行っていきたい。また、今後の世代交代で新たに加入する資料が想定されるため、今回の編成ではサブ・サブフォンドに人物を追加する形で可変性を持たせたという点も特徴といえる。今後の「家」組織の変容を踏まえて、対応していきたい。

【付記】

本稿の執筆にあたり、文書群の保存・管理を続けてきた安島家のみなさまに御礼を申し上げる次第である。なお、「別家安島家資料」の利用を希望される方は筆者にご相談いただきたい。